

三水会会報

北里大学水産学部
同窓会 第53号

平成19年3月発行

編集者 内藤 文隆
発行 三水会(北里大学
水産学部同窓会)
事務局 〒246-0031神奈川県
横浜市瀬谷区瀬谷5-22-1
TEL フリーダイヤル
0120-873-135

<http://www.ajt.co.jp/sansuikai>
E-mail sansuikai@ajt.co.jp

目次	P.1	高橋明義教授就任	P.4
柴理事長学長との懇談会	P.2	職場紹介	P.6
全学同窓会講演会	P.3	第34回漁火祭報告・クラブ助成	P.7
同窓会懇親会	P.4	大阪発信・平成19年度三水会定期総会	P.8



第33回北里大学同窓会講演会と親睦会

全学同窓会と大学幹部との懇談会の協議概要について

水産学部の移転問題が三陸残留で決着

昨年12月2日(土)16時から京王プラザホテルにおいて全学同窓会理事及び各学部同窓会長と、柴理事長・学長を初めとする北里大学常任理事との懇談会が開催され、柴理事長・学長より北里学園の近況について報告された後、意見交換が行われました。

近況報告の冒頭、柴理事長・学長より水産学部の移転問題について言及され、現時点での三陸キャンパスの移転を伴う新学部構想は無理があると判断し、昨年10月開催の学部長会及び理事会に提案し承認を得た旨の報告がありました。

水産学部の移転問題の検討経緯につきましては、農学系学部改革の一環として平成12年に農学系学部改革案が建議され、学部長会等で検討の後、「学部改革農学系委員会(H15・7・H16・1)」、「生物応用生命科学部(仮称)設立検討委員会(H16・7・H16・12)」の二度の委員会の改組を経て、平成17年2月から「農学系新学部設立準備委員会」において基本構想案が検討され、同委員会の小委員会が相模原への移転を含む「応用生命科学部(仮称)構想Ⅱ相模原新学部構想案」を策定されました。

しかしながら、同構想案について、親委員会委員及び常任理事の間で否定的な意見が多く、親委員会付議が見送られたことを受け、

常任理事会で検討した結果、当面は三陸キャンパスの残留が決定したとのことです。

新学部構想が見送られた理由としては、

① 生命科学系の総合大学を目指す北里大学にとって、水産学領域は必須であること。

② 応用生命科学部(仮称)の教育・研究領域は、他学部の領域との重複が不可避であること。

③ 応用科学としての水産学にはフィールドが不可欠で、相模原に移転した場合、現状以上のフィールド確保は困難と思われる、移転による教育・研究環境の悪化が予測されること。

④ 応用生命科学部(仮称)の下での学生志願者の増加は、同名の先発競合校の存在や社会的状況などを勘案すると予測しがたいこと。

⑤ 応用生命科学部(仮称)は、学科構成・教育研究組織などから見て、社会的な要請と将来性を持ち合わせた魅力ある学部として成り立つとの見通しが、現状では立ちがたいこと。

⑥ 移転に関わる経費試算から判断すると、経営的に見通しが立ちがたい(投資額の回収は長期的に見ても困難である)こと。

⑦ その他、三陸での生活に卒業生はもとより子弟の自立心が養

われると卒業生の父兄の満足度が高いことや、大船渡市の行政支援が大きいこと。

等があげられております。

また、柴理事長・学長からは、今回の残留決定を受けて、水産学部の志願者数の増加に向けてハード・ソフト両面の整備について全面的にバックアップしていく旨の発言がありました。

一方で、水産学部の志願者数が年々減少していることは厳然たる事実であり、同窓会に対しても、志願者数の増加に向け、同窓生に対する子弟の受験や、水産学部・三陸キャンパスについての口コミでのPR等について出来る範囲でよいので協力して欲しい旨の発言もありました。

これに対し、三水会としても、これまでの会員間の親睦活動に加え、今後は水産学部のPR活動等、同窓会として出来る協力方法を模索し実行して行きたいと考えている旨の回答をいたしております。

会員の皆様におかれましても、水産学部のことをご存知ないご友人(もうすぐ受験のご子弟がいらっしゃる方)など、水産学部の存在や楽しかった三陸の思い出話を話していただくこともPRの一環でありますことを、頭の片隅に置いておいて戴ければ幸いです。

「水産学部学生課だより」

〇〇〇学生達の近況報告

— 学生数 平成19年1月15日現在 —

1年次生	1991名
(男子149名、女子44名)	
2年次生	168名
(男子126名、女子42名)	
3年次生	164名
(男子121名、女子43名)	
4年次生	190名
(男子148名、女子42名)	
大学院生	34名
(男子23名、女子11名)	
合 計	747名
(男子565名、女子182名)	
内三陸キャンパス	556名
(男子418名、女子138名)	

地域の子供たちを集めて寺子屋風「子供塾」を開校

本学部4年次生の山本浩司君を中心に学生たち10人のボランティアで崎浜地域の小学生を対象とした「子供塾」を平成17年10月から崎浜コミュニティ消防センターで開校しています。現在18名の子供たちが集まり、毎週金曜日17時から19時30分までの間、子供たちに宿題を教えるほか、工夫を凝らしたオリジナルの授業を行なっており、地域の子供たちと楽しく交流を深めています。



第33回北里大学同窓会講演会報告

6期生 川添一郎

環境をテーマとする三水会主催の第33回北里大学同窓会講演会が、平成18年10月22日(日曜日)北里大学白金キャンパス、薬学部コンベンションホールで午後1時から行われました。講演会には、魚類生理学前教授の藤野和男先生をはじめ、同窓生やそのご家族、相模キャンパスで学んでいる1年生の学生諸君らが多数参加しました。講師にお招きしたのは水産微生物学研究室助教授の小池一彦先生、海洋基礎生産学研究室講師の難波信由先生、そして同窓生であり水圏生態学研究室助教授の朝日田卓先生でした。長谷川一敏会長の挨拶に続き、来賓の水産学部卒業生長屋信博さん(同窓会副会長)から挨拶を賜り、その後講演が行われました。長屋さんのお話から、東洋経済新聞の大学ランキングでは北里大学が全国10位であり、水産学部の就職力は水産・海洋系学部での全国ランキングが1位という高い評価を受けていることを知りました。講演では、3人の先生とも、水産学部の現在の風景や越喜来湾の様子などを多数取り入れたスライドを用意され、懐かしい思い出に浸ることができました。先生方が懇切丁寧にスライドを使用して説明されたので、大学で学んだ多くの事柄とは疎遠になりがちな私たちですが、むかし学んだ

ことを少し思い出し、講演内容を理解することができたような気がします。そこで、誠に恐れ多いのですが、先生方が話された内容について、私の理解できた範囲で書かせて戴きます。

小池先生は「地球の未来を支える植物プランクトンたち」と題して講演されました。地球が直面している様々な問題として、人口増加による食糧危機と地球温暖化の二つがあります。地球の人口は21世紀後半には120億人になると予想されており、人口増加に伴い必要摂取カロリーが増加します。穀物類は人間のみならず、畜肉生産の飼料にも使用されますが、人間の食する量を確保すると、飼料に利用できなくなってしまう、従って畜肉生産が困難になってきます。そこで、タンパク質を確保するために、漁獲が重要になります。海での生産力は、一次生産者である多種多様な植物プランクトンを起点とします。一例を挙げれば、植物プランクトンをオキアミが食し、オキアミを鯨が食べて成長します。植物プランクトンの栄養源は無機栄養塩であり、海洋総面積の0.1%にあたる湧昇域に多く含まれます。事実、漁獲のほとんどはこの水域で行われるので、この水域を汚染から守らなければなりません。地球温暖化の防御策として、二酸化炭素を大気から取り除くことが必要です。二酸化炭素は水に溶けやすく、海に溶けた二酸化炭素はカルシウムイオンなど

と反応し、無機的に沈殿しています。しかし、それだけではなかなか二酸化炭素は減りません。急激に二酸化炭素が吸収されるようになったのは、珊瑚などの石灰質の殻を持った生物が現れたからで、骨格をつくるためどんどん二酸化炭素を吸収します。ですから、珊瑚の成育を守れなければなりません。以上が小池先生の講演の概略です。

難波先生は「三陸の海と海藻」と題して講演されました。三陸の海には、寒流系のミツシコンブ、暖流系のアラメ、広域系のワカメといった海藻が生息します。特に三陸の海には、ナンブワカメという、葉の厚み、光沢、弾力のあるワカメが生育しています。ワカメの生育には海と陸が汚染されていないことが重要です。ワカメ養殖は、魚類の養殖と違い無給餌なので、養殖過程による汚染がありません。岩手県は、品質は世界一、生産量と生産額は日本一で、岩手県を象徴する海産物であります。しかし、現状は低価格競争や生産が不安定で減少傾向にあり、後継者不足、漁業者の高齢化が問題になっています。そこで、価格の維持とワカメのブランド化が必要で、ブランド化するためには優良株安定生産システムの確立が重要であります。以上が難波先生の講演の概略です。

朝日田先生は「丸い地球は誰のもの? 人間活動が水圏生態系に与える影響」と題して講演されました。生物には様々な形のものが存在します。先生が研究されているサメを例に挙げ、形態をスライドで示されながら、同じ仲間でも多種多様であることを述べられました。生物の種を保存するためには環境保全が必要で、身近に我々ができることは、有害な物を買わない、使わない、そして捨てないことであることを強調されました。先生方のお話から、今更ながら私たちの海を汚染させないように努力していくことが大切であることが良く理解できました。同窓生の皆さん、海を汚染から守りましょう。

講演の後、学生指導委員長で水産食品学研究室教授の長久英三先生より学部現況の報告がありました。7月から学部長に緒方先生が就任されたことが、水産学部は三陸に存続することが決定されたことを述べられました。また、昨今の入試状況から、偏差値を上げる努力をされていることを強調されました。広報委員長には三水会の仲間であり海洋分子生物学研究室教授の高橋明義先生が就任されたことを話されました。講演と長久先生の報告に引き続き薬学部本館の学生食堂で懇親会があり、高橋明義先生の乾杯により、和やかな歓談が始まり思い出話に花が咲きました。

第33回北里大学同窓会講演会 親睦会

水産増殖学科 24期 八島洋二

平成18年10月22日第33回北里大学同窓会講演会では水産微生物学の小池先生、基礎生産学研の難波先生、水圏生態学の朝日田先生をお招きし、マクロな世界から目に見える水産世界の現状と今後の未来を担う興味深いお話を講演頂きました。講演後、会場から同キャンパス内の学生食堂に場所をかねて、先生方を囲み立食パーティー形式で親睦会を開催致しました。講演会でも興味深いお話で様々な質疑応答が飛び交いましたが、親睦会では講演の時に聞きそびれた事や、会場ではなかなか聞けなかった事、そして何よりも卒業生達の関心事として現在の三陸、今後の三陸（存続も含め……）、少子化影響に受験者数の低下など、三陸の未来を卒業生としてもちゃんと知りたかった事をこの場で気楽に聞けたのではないだろうか。参加者の中には先生が講演される日程に合わせて、当時先生にお世話

になったかつての教え子同士が都合をつけて集い、先生を囲み当時の思い出話に、近況報告に花を咲かせた方々もいらっしゃいました。この会では先生方との親睦をはかるのはもちろんの事、さまざまな世代の異なった参加者同士も顔を合わせる事ができ、卒業生がどんな仕事をしているかも知る事ができ、全く違う輪が広がり、親睦も深められたと思います。

私自身も偶然にも懐かしい友とも顔を合わせることができ本当に楽しいひと時を過ごす事ができました。

普段は仕事で忙しい卒業生の方々、行きたくてもなかなか行く事のできない三陸だけに、親睦会そのものが、旧交を温め、皆をつないでくれる大事な機会である事がわかりました。同窓会や親睦会のおかげで、ちよつとご無沙汰だった母校との距離が再び近づけたのを感じる事ができたのは私だけでしょうか。

今回は限られた時間内ではありましたが、この間で皆さんと飲み語らいあつという間に時が過ぎ、親睦会も幕を閉じました。

残念ながら今回参加できなかった方も次回

は是非、お友達や知人をお誘いの上、ご参加頂ければと思います。この度はお忙しいにもかかわらず三陸からお越し頂いた先生方、お休みのなか白金キャンパスまでご参加頂きました方々、本当にありがとうございました。また次回も充実した会が出来ますよう、皆さんの参加をお待ちしております。



『水産学部教授就任挨拶』

水産学部五期生 高橋 明義

平成十八年四月に川内浩司先生（現北里大学名誉教授）の後任として、水産増殖学講座海洋分子生物学研究室の教授に就任いたしました。世界的に名を成された大教授の後塵を拝し、各方面での責任を痛感し身が引き締まる思いです。既に九ヶ月が経過いたしました、大海原に放り出された小舟のごとく嵐に翻弄されているような不安感が未だに続いております。不安感を払拭するためには研究活動に邁進するしか方法はないと心に決めて仕事に集中し、今年度これまでに数編の原著論文を海外の学術雑誌に投稿いたしました。これらの採否はこれから研究活動を占うものと位置づけており、採択されるまで挑戦を続けるのみです。大学教育は、本学部の高校生向けパンフレットにも謳われているように、当然のことながら研究活動に基づくものです。新分野を開拓し、これを卒業論文研究や講義等に活用していく所存であります。

最近、教育改善に役立てるため学生による講義評価も行われています。昨年度まで担当していた「海洋生物工学（三年選択）」では多分ワーストテンを脱したことがありません。今年度前期の「海洋分子生物学（三年選択）」ではワーストスリー入り。試験時には講義の時に比べて学生数が激減しますが、これは一部の学生によれば



熱弁をふるわれる高橋教授

講義が「難解」であるためらしい。ところが昨年度は百点、今年度は九十八点がありました。当人に聞けば、難しいからこそ努力したといえます。これにより、講義に関する学生の評価はあまり参考にならないとの結論、すなわち自己弁護を得ました。

講義の上手下手は歴然として存在します。学生時代に聴講した最もわかりやすい講義は、東北大学そして麻布短大で教鞭を執っておられた先生の「食品物理学」。ノートをまとめると本が完成することを思わせるほどの見事な語りと板書でした。名人は近くにもいます。同期（五期）卒業の奥村誠一助教授（魚類生理学研究室）は三年連続でベストティーチャー賞、しかもずば抜けて高い評価を得て

いる。そのうち奥村先生の講義に侵入し、エッセンスを盗み出そうかと考えています。

さて、本会報五十二号で緒方武比古水産学部長が述べておられるように、地方大学は少子化の影響から極めて厳しい状況に置かれており、本学部でも平成十八年度は志願者が前年度を大きく下回りました。私は昨年七月に広報委員長に任ぜられて以来、七名の委員長の先生と力を合わせて、受験生獲得を目指し「北里大学水産学部」の知名度の上昇を図るべく活動を開始いたしました。その内容は高校訪問による進路担当教員との面談、高校での出前講義の実施、ホームページの改良、三陸キャンパス見学会の設定などがあります。

高校訪問については委員の先生

方に分担していただき、岩手県南、宮城、新潟、東京、神奈川方面に出張して頂きました。私自身は学会などの機会を利用して千葉、静岡、岡、広島、鳥取、島根、岩手（盛岡、花巻、北上）方面を巡りました。花巻東高を訪問したときに応対した

先方の教員は本学部の卒業生であり、その活躍を目の当りにして大いに勇気づけられました。また、定年をまもなく迎えられる神谷久男・長久英三両教授が、水産学部の将来を案じて訪問に出かけてくださったときには感激いたしました。両先生にはこの機会に本稿を借りて改めて御礼を申しあげます。高校訪問は、ほとんどの教員にとつて初めての業務であるため、今年の訪問は度胸試しであり、本格的に始まるのは平成十九年度の初夏からであると考えております。

出前講義は、高校側からの要請により浜松湖南高校（静岡）、古川学園高校（宮城）、大船渡高校・水沢高校（岩手）に向きました。講義後、担当の先生からは好感触であった旨を伝えられ、出前講義の宣伝効果を実感いたしました。この記事を讀んでいる全国の高校教師の皆さんは、本学部のホームページに掲載している出前講義のメニューを是非御覧下さい（<http://www.kitasato-u.ac.jp/fish/fisheries.html>）。全国どこへでも、経費当方負担で（予算の続く限り）出かけていきますのでご希望の講義をご指定願います。

ホームページには順次コンテンツを追加しています。その中には教員の活動を報じた新聞の切抜きがあります。河北新報に連載されたエッセイ、東海新報に載ったヤマメの生態調査活動や漁業関係の

シンポジウム講演原稿などがあります。これらは、活き活きた本学部教員の研究活動を伝えております。卒業生の活躍の様子もホームページに載せていきます。後輩の励みになるよう自薦他薦を問わず記事を募集いたします。まずは是非情報を提供願います。まずは、水産学部広報委員長宛に etisan@kitasato-u.ac.jp あるいは電話（代表〇一九二・四四・二一二一）を頂くことができれば幸いです。

わが水産学部では昭和五十一年三月に最初の卒業生を送り出しました。今年の三月には三十二期生が巣立ちます。卒業生が自分の子弟を入学させたくなる大学、それが水産学部の理想の姿でありましょう。私は、計算上はあと十六年間、三陸の水産学部に奉職することになります。当面行うべきことは緒方学部長を盛り立てて本学部発展に尽くすことです。しかし、平成十九年一月十九日現在、本学部の志願者数が昨年比で減少していることを見据えると、この先には厳しい現実が待ち受けていることは確実であります。持ちこたえるために、僧越ながら厚くましくも卒業生のご支援を切望するものであります。最後になりますが、卒業生の皆様の益々のご活躍をお祈り申しあげます。

職 場 紹 介

鳥羽水族館勤務

水産学部24期生

芦刈 治将

私が勤務しています鳥羽水族館は1955年に創立され、今年で52周年を迎えます。これまでスナメリ、ラッコの2世誕生、ジュゴン、アフリカマナティの飼育記録更新、そして、シーラカンス、イッパククの自然界での撮影など、多くの話題を提供してきました。そして、2004年には入館者が日本で唯一、5000万人を突破しました。



現在、850種200000点の海や川の生物を幅広く展示しており、生き物たちの種類やそれらが棲息する環境に合わせて、12のゾーンに分けられています。そして、お客様に興味のあるテーマを存分にご覧いただくため、観覧順序を無くし、自由通路となっているのが特徴で、お客様のお時間に合わせてご覧いただくことができます。また企画展示やイベントなども多数開催しており、リピータ



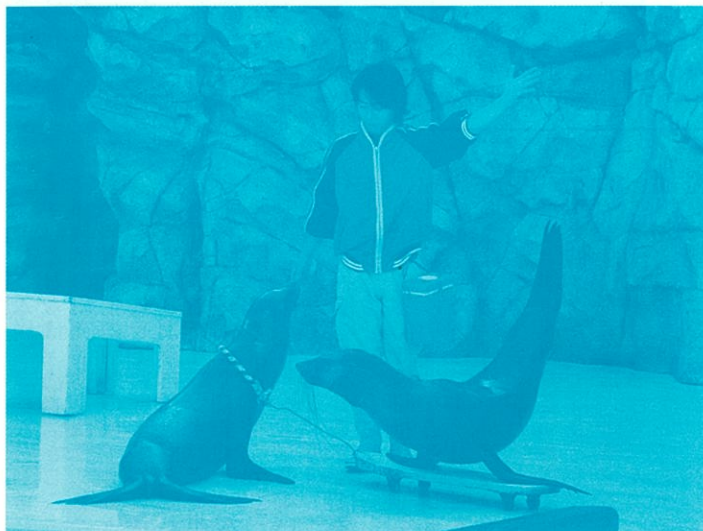
ーの方にも満足していただけるような工夫をしています。

鳥羽水族館の飼育研究部は大きく2つ「魚類、両生爬虫類グループ」と「海獣類、アシカショーグループ」に分かれています。私は「海獣類、アシカショーグループ」のショーチームの方へ現在所属しており、主に、セイウチ、アシカ、ペリカンのショーを行っています。伝統あるアシカショーは現在、カリフォルニアアシカ、オタリア、アフリカオットセイが出演する4通りのショーをご覧頂くことができますが、近々、リニューアルしたショーもお見せできる予定です。またセイウチのパフォーマンス笑（ショー）は、まだ入館して1年ほどのセイウチがお客様の目の前まで登場してコミカルなショーや触れ合いなどを行っています。またペリカンのショー（給餌とお散歩）はお客様の目の前に数羽のペリカンたちが飛び出してきて、飼育係のおもしろトークでペリカンの生態や体のつくりを紹介しています。

セイウチやペリカンのショーは、私が入社してから出来たもので、開始当初よりたずさわっています。鳥羽水族館の社風として「まず、やってみよう」というのがあります。「思い付いたら、即実行」というのが私の思いと合っていたのか、様々な失敗を経験しながらも、セイウチやペリカンショーは、手前味噌ながらお客様から好評を得ています。

また、私は幼い頃より、「ザリガニ」が大好きで、生き物が好きになったのもザリガニのお陰で、私の原点だと思っています。そんな私に大チャンスが転がり込んで来たのは入社して1年が経った夏の企画展「ザリガニ展」でした。今思うと、よくあの仕事を私が任されたなあという思いがしています。先輩方の指導の下、鳥羽水族館の展示とはこうなんだということも含め、その後の私にとって大変貴重な経験となりました。その企画展終了後、現在も常設でザリガニ類を展示、担当しています。こちらも今後リニューアルオープンする予定です。水族館でザリガニを

複数種常設展示している所はなく、また最近、外来生物法により規制が厳しくなってきたため、水族館での展示は大変有意義なものと考えています。私が鳥羽水族館でできること、それはお客様に「満足」して頂くこと。サービスマンとして何ができるのか？ お客様満足度ナンバー1の水族館を常に目指しています。そんな鳥羽水族館へぜひ足をお運びくださいませ。



第34回漁火祭報告

第34回北里大学水産学部漁火祭
実行委員長 長谷川 裕郁

“平成18年10月14(土)、15(日)の2日間第34回北里大学水産学部漁火祭が行なわれました。4月の実行委員長になり、当日まではあつという間でした。実行委員63名で漁火祭を企画、運営していくことは、とても大変でしたが、毎日楽しい日々でもありました。今年の漁火祭では、2日間とも快晴で学園祭を行うには、最高の天気でした。当日は、多数の地域の方が三陸キャンパスに足を運んでくださいました。これも、私達が考えた「在学生だけが楽しむ学園祭ではなく、地域の方も楽しめる学園祭」を企画したためだと思います。

また、今年の漁火祭では、去年と異なる企画に挑戦しました。新企画には、研究室紹介、ミスコン、ミスターコンなど多数の企画を行い、大盛り上がりとなりました。新企画の研究室紹介では、大学の研究内容をポスターにして、いたい大学では何を行っていて、それが社会でどのように活かされているかなどを紹介しました。漁火祭は三水会をはじめとする関係者の皆様のご協力があったからこそ成功することが出来たと思います。

最後になりましたが、漁火祭実行委員を代表して、皆様に心より

お礼を申し上げます。ありがとうございました。

平成19年度クラブ助成は北海道へ

活動内容

正規練習は週に4回で、しばしば他県へ出稽古に行くこともあり、年に1度、指導者講習会にも参加しています。練習は4日といつも同じ事をするのではなく、1つのテーマについて段階を踏んでやってみたい、自分たちで考えたメニューや、出稽古、講習会で学んだメニューを盛り込んで、新鮮かつ効果的な練習を目指して活動しています。

また、正規練習の他にも、大船渡の祭り、学校や会合、他県での演武会などに積極的に参加し、知名度のあまり高くない北海道を広くようと活動しています。そして今では少しずつではありますが、北海道を知っているという方も増えてきています。

大会では個人戦での入賞と北海道を広くつとも本懐を忘れず、日々練習に励んでいます。この結果は北海道の先生、先輩方のお力添えもありますが、やはり、人数が少ないうちに甘えず、自分たちで考え、精進してきた結果であると思います。

また、17年度の冬には岩手県北海道協会の設立。18年度の夏には、北海道東北地区北海道定期戦大会を

企画・運営し成功をおさめ、19年度には第2回大会も開催する予定です。19年度からは主将、監督も代わり、新たな気持ちで頑張っていくつもりです。

平成18年度成績

全国学生大会 個人実戦第4位
内山竜一(4年)
青森県大会 個人実戦第3位 武田明菜(3年)
石巻さかな祭北海道優勝大会 個人実戦優勝 山口未来耶(2年)
弘前さくら祭大会 新人法形優勝 相馬 淳志(2年)

『三水会助成金をいたただいて』

北里大学水産学部体育会
北海道主将 2年 山口未来耶

この度は、三水会より助成金を頂きまして誠にありがとうございました。

現在、我々北海道部は大学院生1名、4年生7名、3年生2名、2年生2名の12名で活動しています。4月から新2年生を迎え、新しい代での部活がスタートします。活動日は毎週月曜、水曜、木曜、土曜の週4回体育館でやっています。他の部活動に比べ、若干人数は少ないですが、そこに甘えることなく、厳しく、そして楽しく日々稽古を行っています。

稽古内容は、基本の構えから、

法形(型)、そして実戦と他に遅れをとらないよう満遍なく行っています。

昨年の4月末に行われた青森県弘前市で行われた大会では新人法形(型) 競技で優勝、7月の青森県大会では女子個人実戦で3位、9月の宮城県石巻市での大会では男子個人実戦2位、10月の全日本学生大会では男子個人実戦4位を獲得するなど、各大会での活躍が見られました。

頂いた助成金は北海道部の更なる、躍進のために使わせて頂きます。体育会北海道部を代表して心よりお礼申し上げます。

本当にありがとうございました。

平成19年4月から
三水会ホームページが
リニューアルします。

最新情報はこちらにアクセス



<http://kitasato-sansuikai.jp/>

お知らせ

■平成19年度三水会定期総会のご案内

下記日程にて、平成19年度三水会定期総会を開催いたします。

役員はもとより、一般会員の方も傍聴できます（総会終了後、懇親会を開催します）。

（開催日時） 平成19年5月19日（土）午後6時～7時（受付5時30分）

（開催場所） 北里大学白金キャンパス3号館8階3802会議室

（議 事） ①平成18年度事業報告、収支決算 ②平成19年度事業計画、収支予算
③その他

■関東地区親睦会

下記日程にて、関東地区親睦会を開催いたします。

日時 平成19年7月29日（日）9時集合

場所 千葉県木更津市北浜1番地（金田海岸）スパ三日月龍宮城

TEL 0438-41-8111 <http://www.mikazuki.co.jp/ryugu>

当日は潮干狩りと昼食そしてスパ施設をご利用できます。ふるってご参加下さい。

会費 大人 2000円 / 小中学生 1000円

申し込みは 0120-873-135

E-mail: sansuikai@ajt.co.jp

申し込みは 6月30日までお願いします。

■大阪発信

三水会地区親睦会を下記の日程で開催します。

日時 平成19年4月29日（日）

13時～15時（受付12時30分）

場所 大阪市中央区東心斎橋1丁目13-12

中国料理「大成閣」

TEL 06 (6271) 5238

会費 10,000円

来賓 緒方学部長 長久食品化学研究室前教授

申し込みはこちらまで

7期) 水島正信 072-244-0876

090-5668-6006

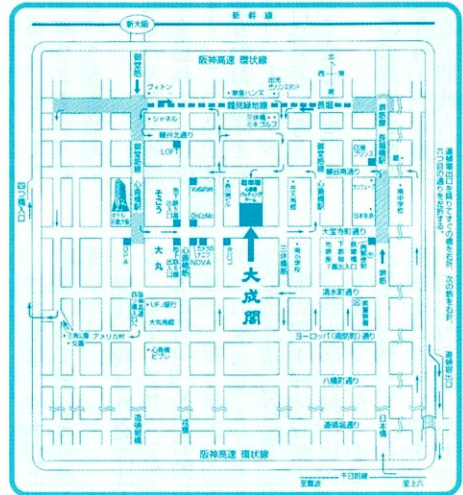
E-mail: tomomino@zeus.eonet.ne.jp

申し込みは 3月31日までお願いします。

e-mailで申し込みの方は、名前、卒業期、電話番号を記入して下さい。

*全国どちらからでも参加できます。尚、詳細は三水会事務局へ問い合わせ下さい。

（0120-873135） 恩師を交え、懐かしい一時を過ごしましょう。



～訃報のお知らせ～

水産増殖学科4期生金野信生さんが平成18年12月16日ご逝去されました。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

地球温暖化か、一時的な異常気象か、とにかく日本列島は全国的に暖冬となっているようです。昨年開催された全学同窓会講演会においても講演の中で三陸周辺の海水温の変動やそれに伴う海洋生物への影響が紹介されました。知床に負けないくらい堅固に守られていると思っていた三陸の大自然も徐々に移ろってきているようです。不透明だった水産学部のゆくえもどうやら三陸の地に落ち着くことになるようです。いろいろな問題点もあるかと思いますが、方向がはっきりと決まったことでもあり、三陸の地でいかに発展してゆくか見守っていくとともに、三水会としても協力をしていきたいと考えております。あの大自然とスローライフそこの最先端の研究という超ミスマッチな世界を再認識していただき、会員の皆様には水産学部と三水会に対して今後とも関心をもって、活動にご参加いただきたいと思います。